

IV 研究2

研究1の結果から、学校不適應の子どもへの支援を考える上で、「支援環境の整備」「適切な見立て」「支援者の資質向上」「関係機関との連携」がより重要な視点であることが見えてきた。この検証には、聞き取り調査から選定した研究協力校（小学校1校、中学校1校、高等学校2校）や研究協力機関（教育支援センター2か所）を、この4つの視点に着目して視察し、特に1校では学校支援を通じて、4つの視点を重視した実践をし、成果を確かめた。

1 4つの視点に着目した視察

(1) M小学校の実践（学級数：普11，特2）

【「支援環境の整備」の視点】

ボランティアを有効に活用している。ボランティアは教職を目指す近隣の大学生である。市教育委員会が大学からボランティア活用の依頼を受け、学校の要望に応じて配置している。ボランティアに子どもを担当させる際、具体的な指示を与えたり、ボランティア側の目的を把握し、それに合った活用の仕方をしているため、有効な活用となっている。

また、学生自身が、「自分がいることで子どもが安心してくれるとうれしい」「先生方の負担の軽減に役立ちたい」「教育現場にいて、先生方の実践が指導案作成や模擬授業の手本になる」などと感じており、成就感を抱いている（資料1-2参照）。

<要点>

M小学校では、学校がボランティアに対する要望を明確にすることができたため、有効に活用することができている。

資料1-1: ボランティアが関わっている事例 ※訪問月: 5月

Yくん（1年生）

幼稚園の頃は、登園できなかった。小学校で大学生ボランティアが関わり、関係を築き、登校できるようになってきた。先週1週間は父親が、今週は産後2週間目であるにもかかわらず、妹を連れた母親が一日中、学校にいて様子を見てくれている。こだわりが強く、給食を食べなかったが、校長が声かけをしながら、今日のみそ汁（豆腐が入っていないとだめ）だけ、今日は牛乳だけという形で少しずつ食べられるようになってきている。

資料1-2: ボランティアへの聞き取り

Q: いつからボランティアを始めたのか。

A: 大学1年時の6月から始めた。今年度で2年目になる。

Q: ボランティアを始めたきっかけは。

A: 大学内で、学校支援ボランティアの募集があったので応募した。

Q: なぜ、M小を選んだのか。

A: 大学から近かったから。

Q: 同じ学校に2年続けてやっている理由はあるのか。

A: 1年目は、学校からの指示で様々な学級に入って支援をしていたため、多くの子どもと仲良くなれた。そのため、自分からお願いして2年目もボランティアをさせてもらっている。

また、今年度は自分からお願いして、特別支援学級につかせてもらっている。

2年目になったので、どのように動いていいのかが少しずつわかってきた。

Q: ボランティアとして週に何回くらい来ているのか。

A: 大学の授業の関係で、前期は毎週火曜日の午前中のみ、後期からは毎週火曜日は終日来ることができる。また、火曜日以外で小学校の大きな行事がある場合、自分の授業の都合が合えば、できるだけ参加するようにしている。

Q: ボランティアをすることで、大学の単位認定になるのか。

A: 申請すれば認定されるが、自分は単位が足りているので申請はしていない。

Q: 小学校側との打合せはいつ行っているのか。

A: 打合せの時間は特に設けていない。その都度、担任等から具体的な指示をしてくれるので動きやすい。わからないことは、その都度聞くようにしている。また、放課後の打合せも特に行っていない。

Q: 小学校側への要望等はあるか。

A: とくに思い当たらない。先生方は気さくに接してくれている。

日々の先生の忙しさを見ていると学生だからできるようなことをやらせてもらっていると思う。

子ども達と一緒にいるだけで自分は十分である。

できれば、小学校側から何らかの評価をしてもらえるとありがたい。

Q: ボランティアをやっていて良かったことはあるか。

A: 大学の授業で教職についての内容を学習している。指導案づくりや模擬授業等でボランティアの経験が活かされている。さらに教育実習にも活かされるのではないかと考えている。

Q: 同級生等で、ボランティアで学校に入っている友人もいるか。

A: 何人かいる。友人と話をしていると、学級崩壊寸前の様子を見ていて、先生の指導に疑問を感じる場面があるようなことを言っていた。M小はそのような事が無く、とてもやりやすい学校だと思う。

(2) N中学校の実践(学級数:普24,特2)

【「支援者の資質向上」の視点】

生徒指導部が、「不登校対策資料」(13ページからなる冊子)を全職員に配布し、全校体制で不登校の改善に取り組んでいる。

資料は「欠席の分類と主な理由について」「督励簿様式」「不登校タイプ分け」「タイプ分けチェックリスト」「不登校回復過程5段階」「状態像チェックリスト」「不登校の回復を援助するかかわり方」「回復を援助するかかわり方チェックリスト」等の内容からなる(資料2参照)。これにより、全職員が共通した基準により不登校を認識し、共通理解と共通実践を行いやすくなっている。また、資料作成にあたっては、不登校に関する専門家の著書を参考にしている。

【「適切な見立て」の視点】

月1回、校内長欠対策委員会(管理職、教務主任、生徒指導主事、学年主任、各学年教育相談、養護教諭、適応指導教室担当、スクールカウンセラー)を開催し、「不登校対策資料」をもとに、タイプ別・状態別の前年度との比較分析、対象生徒の現状と変化、次月の見通し等の情報交換及びケース会議を行っている。

【「関係機関(小学校と中学校)との連携」の視点】

校区の小学校長の呼び掛けにより、平成24年度は年2回、平成25年度は年3回、校区内の小学校との連絡協議会を開催し、児童生徒に関する情報交換等を行っている。

<要点>

N中学校で活用している前出の資料は、非常に詳細にまとめられ専門性の高いものになっている。高い専門性に裏付けられた適切な見立てによって、個別の支援計画が立てられ、全職員の共通理解の基に支援がなされ、資質向上にもつながっている。

資料2:N中学校不登校対策提案資料 ※掲載用に一部修正

平成25年度 生徒指導部 不登校対策提案資料

不登校対策

S Cから〇〇〇〇先生の著書を薦められ、不登校対策として、従来の特例簿の他に
→(1)タイプ分けチェックリスト→(2)状態チェックリスト
→(3)回復を援助するかかわり方チェックリスト→(4)長欠対策委員会(仮名)
という流れで、不登校の減少を目指そうというもの。

- ◎ 欠席の分類と主な理由について・・・1
(4-0-34)
- ◎ 督励簿・・・2・3
(4-0-35・36) 〆切月末 担任→学年長欠報告担当→生徒指導主事→校長
- ◎ 不登校タイプ分け・・・4・5
(4-0-37・38)
- ◎ タイプ分けチェックリスト・・・6
(4-0-39)
- ◎ 不登校回復段階・・・7
(4-0-40)
- ◎ 不登校の回復過程-五つの段階・・・8・9
(4-0-41・42)
- ◎ 状態像チェックリスト・・・10
(4-0-43)
- ◎ 不登校の回復を援助するかかわり方・・・11・12
(4-0-44・45)
- ◎ 回復を援助するかかわり方チェックリスト・・・13
(4-0-46)

〇〇市立〇〇中学校 生徒指導部

タイプ分けチェックリスト

当てはまる・○ やや当てはまる・△ 当てはまらない・×

() 年 () 組 () 番 氏名 () (男 ・ 女)	
A 心理的要因をもつ急性型	B 心理的要因をもつ慢性型
①感受性鋭く、深く悩む	①敏感すぎる(音・光・言葉・雰囲気)
②まじめ、几帳面である	②おとなしく、目立たない
③こだわりをもつ	③何事に対しても不安緊張が高い
④友達はいる	④友達をつくるのが苦手
⑤成績は悪くない	⑤学習の基礎でつまづく
⑥思春期の不安・葛藤が強い	⑥心身とも丈夫でない
⑦神経症的な状態を示す	⑦頭痛、腹痛などを訴える
⑧親に養育・保護能力はある	⑧親自身に不安や不全感がある
⑨発達に問題は感じられない	⑨発達上の問題が感じられる。(心理治療を要するレベル)
C 教育的要因をもつ急性型	D 教育的要因をもつ慢性型
①性格は明るく活発なほうである	①内気で自己主張が上手でない
②勉強や運動を頑張っていた	②勉強が少しずつ遅れてきた
③友達をつくる力がある	③友達関係が維持できない
④家庭環境は健全である	④家庭が過保護・過干渉である
⑤友達とのトラブルがある(いじめ等)	⑤学級崩壊を経験している
⑥教師の強すぎる叱責、厳しすぎる指導	⑥教師の指導力不足(本人に・学級に)
⑦学習の挫折(伸び悩み・急落・失敗)	⑦進級・入学等で環境の変化がある
⑧発達上の問題はない	⑧発達に弱さがある(教育的支援で改善可能)
E 福祉的要因をもつ急性型	F 福祉的要因をもつ慢性型
①家庭生活の急激な変化があった(親の不仲・病気・死・離婚・再婚・リストラ)	①家庭崩壊がある
②最近顔色が悪く、表情が暗くなった	②不安や不信の表情がある
③最近投げやりな態度が目立った	③反抗や不服従がみられる
④学習意欲が減退し、成績が急落した	④経済的に困窮している
⑤短期間に適応力が低下した	⑤親が長期的病気である
⑥親に保護をする精神的余裕がない	⑥親の保護能力(衣食住)が低い
⑦最近服装の汚れや、忘れ物が目立った	⑦虐待が疑われる
⑧発達上の問題はない	⑧発達上の問題がある(能力があっても育っていない)

状態像チェックリスト

()年()組()番(男・女) 氏名()	十分確認できる・・・・・・・・・・○ 確認できるが十分とはいえない・・・△ 確認できない・・・・・・・・・・×
(月/日)	/ / / / /
(初期) 不安定・混乱期	
①腹痛・頭痛・発熱などの身体症状がある	
②食欲・睡眠時間等で生活の乱れがある	
③物や人に当たるなど攻撃性がある	
④感情や行動のコントロールができない	
⑤気力が低下する	
⑥恐怖感が強く、人目を避け外出しない	
⑦学校の話題に激しい拒否感を示す	
↳ (これ以上悪くならない感じ) ↓	
(中期) 膠着・安定期	
①気持ちが外に向き、活動の意欲が出る	
②趣味や遊びに関心をもつ	
③気持ちを言葉で表現する	
④きっかけになった出来事に触れても混乱がない	
⑤同じことの繰り返しがなくなり膠着状態から脱す	
⑥手伝いや家族への気遣いをする	
⑦部屋の掃除や髪のカットなど、整理・区切りをする	
⑧気の置けない友人に会う	
⑨子どもの状態に配慮する先生に会える	
⑩教育センターや適応教室に通い始める	
↳ (思考・行動に方向性をもつ) ↓	
(後期) 回復・試行期	
①自分を肯定する言葉が出てくる	
②進学や就職の話をするときに笑顔が現れる	
③アルバイトや学習を始める	
④担任や級友あど学校関係者に会う	
⑤登校や進学・就職に向けて動き出す	
⑥不登校のことを振り返る	
↳ (自立の動きが実現する)	

※チェックリストの見方※初期は経過とともに○が減り、中期・後期は○が増える

(3) O高等学校の実践（学級数：普30）

【「支援環境の整備」と「適切な見立て」の視点】

生徒からの相談を受ける組織として「教育相談部」を置き、5名の担当職員を配置している。教育相談部職員は自ら相談を受ける他「パーソナルチューター制度」を運営している。この制度は、生徒一人につき1名、学級担任や教育相談部以外に個別の相談ができる教職員を割り当てる制度である。現在は60名ほどの教職員がこの制度に参加し、パーソナルチューターとして登録している。個別支援が必要な場合は、学校としての指導体制や共通理解事項を決定する「サポート委員会」にかけ、対応する。

また、すでに学習の遅れのある不登校経験者への配慮として、午前部・午後部は3クラス4展開、夜間部は2クラス3展開の少人数授業を実施する他、1年次で学校設定科目（国・数・英）を開設、スムーズな学習移行を図っている。3年で卒業を目指す生徒も、1年次において、前期は1日につき授業4コマ、後期は6コマとし、スタート時に過剰な負荷をかけない工夫をしている。

不登校経験者の不規則な生活リズムに配慮し、秋入学は当初、午後部の時間帯から授業をスタートし、2年次から自分の所属する部の時間帯で学習する形をとっている。クラス単位ではなく、毎時間その授業を選択した生徒が、授業の行われるそれぞれの教室へ移動する単位制高校の特徴が、人間関係形成の困難さを抱える生徒に適した方式となっている。学校行事等は自由参加となっているが、近年は積極的に参加をする生徒も多くなっている。

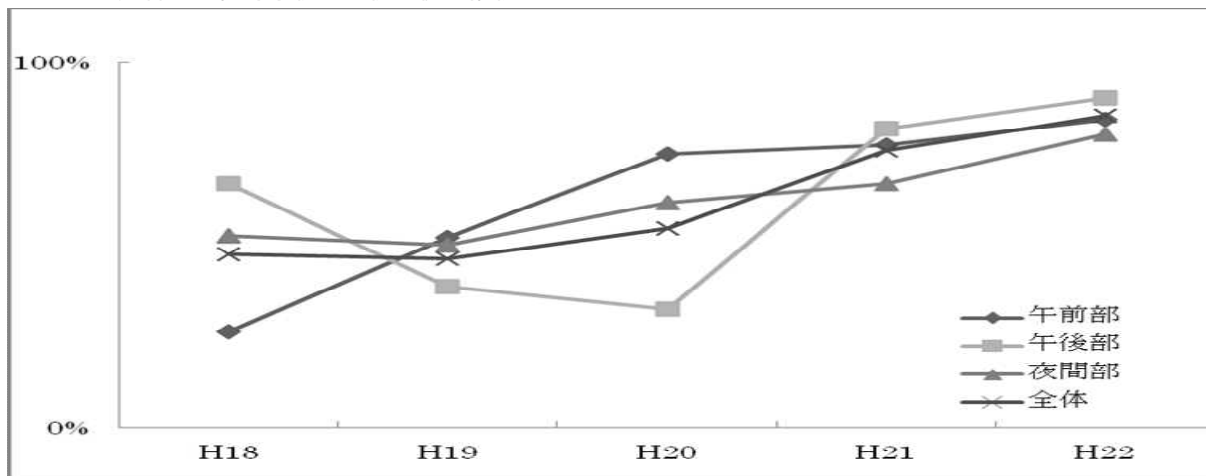
【「支援者の資質向上」の視点】

教育相談や不登校生徒の対応に関する職員研修を年5回行い、PTA対象には、不登校の子ども理解や対応についての講演会や座談会を、スクールカウンセラーを講師として実施している。

<要点>

O高等学校では、担任、教育相談部の教員、パーソナルチューターがそれぞれの立場で生徒に関わり、多面的に生徒理解に努めていることが、適切な見立てにつながっている。また、学校体制が確立されていることで、継続性のあるきめ細かで組織的な対応が可能となっている。さらに、研修会が定期的に行われ、教員の資質向上が図られている。

資料3:0 高等学校不登校回復率推移



(4) P高等学校の实践 (学級数：普24，理3)

【「支援環境の整備」の視点】

医師の診断書がある等の特別な事情がある場合，欠課時数に配慮し，規定の欠課時数を超えないよう，長期休業期間等を利用して補講を実施している。当該生徒の補講の認定は，6月と11月の「認定委員会」（教頭，教務主任，当該学年主任，当該学級担任）で行い，職員会議を経て補講の実施となっている。

資料4:認められた特別補講例

6月末 夏季休業中に実施する。

学年	生徒	科目 (単位数)	補講時数
2年	Aさん	a (4)	6
		b (2)	2
		c (6)	2
		d (4)	1
2年	Bさん	e (1)	1
		f (2)	2

9月末 秋休みに実施する。

学年	生徒	科目 (単位数)	補講時数
2年	Bさん	d (4)	1
		e (1)	1
		f (2)	4
		g (2)	1
		h (2)	2
		i (2)	2
		j (2)	2

11月末 冬季休業中に実施する。

学年	生徒	科目 (単位数)	補講時数
2年	Bさん	c (6)	8
		d (4)	4
		f (2)	1
		g (2)	2
		h (2)	4
		i (2)	3
1年	Cさん	j (2)	2
		k (5)	12
		l (4)	1
		m (6)	11
		n (2)	6
		o (2)	3
		p (3)	4
		q (2)	5
r (2)	2		

(5) Q教育支援センターの実践

【「関係機関（教育支援センターと在籍校）との連携」の視点】

入級申請書類を学級担任が直接センターまで提出に来ることで、担任と指導員との情報交換及び担任との人間関係づくりの場としている。軽スポーツ活動に担任が参加し、児童生徒と交流する「ふれあい担任会」を実施している。活動後、児童生徒と担任が対面で歓談する場が、担任との親密感を高め、つながりを実感できる機会となっている。児童生徒がテストを希望する場合、センターが依頼し、担任が用紙を届けている。これにより児童生徒は、担任が自分を見てくれているという実感を受け、学校でテストを受けようとする意欲につながっている。学校ホームページに「適応指導教室」の紹介コーナーを設置し、保護者及び教員への理解と周知を図っている。

【「支援環境の整備」の視点】

体験活動として、農業センターの畑を借り、サツマイモ・ジャガイモ栽培を行い、達成感を味わえる活動を行っている。また、親子で参加できるパソコン教室・陶芸教室（年2回）を実施し、親子のふれあいの場を設けている。不登校の児童生徒に起こりやすい体力の低下に対する取り組みとして、毎週木曜日の午前中に、近隣の体育施設での軽スポーツ活動に取り組んでいる。

【「支援者の資質向上」の視点】

教職員向けの研修会に指導員も参加し、資質と技能の向上に努めている。年2回、児童生徒の在籍校のスクールカウンセラーによるスーパーバイズを実施し、専門的な視点より、適切な支援の仕方を研修している。これを受け、その後行われる「担任面接」「保護者面接」の充実を図っている。

<要点>

Q教育支援センターでは、様々なイベントを設定し、担任と不登校の子どもが接点を持つ機会や、担任と指導員及び指導主事が接点を持つ機会を整えている。指導員も教職員とともに研修を受けることで資質向上を図っている。

資料5:年間行事予定 ※掲載用に一部修正

		◎印は市バス利用行事			
月	日	曜	おのな行事内容	活動場所	備考
4	19	金	◇開級の集い	各体育施設	保護者・担任
	23	火	◇活動開始（半日）		
	25	木	◇スポーツ開始		
5	7	火	◇1日活動開始	農業センター 教育センター 農業センター	保護者 担任
	10	金	◎第1回教室外体験活動（サツマイモ植付け）		
	14	金	◎第2回教室外体験活動（ジャガイモの収穫） ◇担任面接を適宜実施（19日、21日、26日予定）		
6	28	金	◎第3回教室外体験活動（葛西臨海水族園）	校外学習	
	11	木	◇終わりの会		
	17~19	水	◇第1回保護者面接（17日、18日、19日） ※夏休み（7/12~8/26）		
7	19	金	◇学習会（後日連絡：3日間）		保護者
	下旬		◇学習会（後日連絡：3日間）		
	27	火	◇始めの会		
8	27	火	◇始めの会	農業センター	
	9	金	◎第4回教室外体験活動（サツマイモ収穫）		
	4	金	◇焼き芋体験学習		
9	9	水	◇活動終了 ※秋休み（10/10~10/16）	教育センター 各教室体育施設 教育センター	保護者 担任 保護者
	17	木	◇活動開始		
	25	金	◇親子陶芸教室（第1回）		
10	31	木	◇ふれあい担任会	校外学習	
	11	金	◇親子陶芸教室（第2回）		
	13	金	◎第5回教室外体験活動（野外活動：未定）		
11	19	木	◇終わりの会 ※冬休み（12/20~1/6）		保護者
	7	火	◇始めの会		
	5~7	水	◇第2回保護者面接（中3以外の児童生徒） （5日、6日、7日予定）		
12	14~21	水	◇担任面接（中学3年以外の児童生徒） （14日、19日、21日予定）	農業センター	担任
	5	水	◎第6回教室外体験活動（ジャガイモ植付け）		
	7	金	◇中学3年生 終了の会		
1	14	金	◇終了の集い（中学3年以外の児童生徒）	保護者・担任	
	14	金	◇終了の集い（中学3年以外の児童生徒）		

◇体育施設での活動（毎木曜日・午前中）

(6) R教育支援センター

【「関係機関（教育支援センターと在籍校）との連携」の視点】

年度初めに、市教育委員会が全小・中学校へ、学校とセンター間の円滑な連携関係を築く文書を送付し、共通理解を図っている（資料6-2参照）。

学期に一度、子どもの在籍校を担当指導主事と指導員が訪問し、担任と指導員が情報交換を行う「担任連絡会」を行っている。その際、充実した会となるよう「担任連絡会メモ用紙」を活用し、十分な準備を行っている（資料6-1参照）。

学校がセンターの指導員と定期的に連絡会を行っていることで、学級担任や生徒指導主事もセンターに訪問しやすくなっている。さらに、教員がセンターに頻りに訪問することで子どもが学校とのつながりを感じることができ、よい効果を生んでいる。センターの指導員が、在籍校の担任と直接電話で連絡がとれる体制もとっているため、即時的に情報交換を行うことができ、より効果的な子どもの支援を可能にしている。

<要点>

R教育支援センターでは、センターの指導員と在籍校の教員が、相互の理解と協力への高い意識を持っており、そのためのシステムも整備されている。

資料6-1:担任連絡会メモ用紙(原本A4判) ※掲載用に一部修正

実施日時	月 日 () 時 分～ 時 分
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ☆お互いに情報交換し合った内容については、慎重に扱う。(守秘義務) ○□□市教育委員会の職員であることを自覚し、対応する。(服装, 言葉遣い等) 名札着用。 ○普段の様子, ふれあい面接や保護者面談の際の様子を話し, 児童生徒, 保護者の願い, 考えを伝える。 ○担任の先生へ積極的な関わりを持ってもらうよう依頼する。 (センターへの訪問, 児童生徒へのコンタクト) ○中学校3年生については, 情報を提供してもらうとともに, 進路指導についても依頼する。 ○学校に気持ちが向きそうなお子さんについては, 学校でどのような受け入れ体制ができるか, 連携の方法を探る。
センターから	センター所員が, 事前に伝える内容を記入しておく。
学校から	連絡会当日, 学校からの情報を記入する。
その他	

平成 第 年 月 日

(あて先) □□市立各小中学校長

□□市教育委員会
教育長
(公印省略)

□□市立小中学校及び□□市教育支援センターとの円滑な連携について (依頼)

日頃より、本市の教育行政及び本教育支援センターにご理解とご協力を賜りまして感謝申し上げます。

ついては、通所している児童生徒の学校復帰等をめざし指導主事または指導員が、下記のとおり、学校との連携等を図りますので、御理解と御協力をお願い申し上げます。

記

1 □□市教育支援センターの運営目的

- (1) 通所児童生徒の円滑な通所及び学校復帰に資する。
- (2) 将来的な社会自立を支援する。

2 連携内容

以下の(1)～(3)の連携内容については、教育支援センター担当指導主事が通所している児童生徒の在籍校長に連絡を行うことを原則とする。

- (1) 必要に応じセンターの指導員から学級担任へ電話連絡等を行うことを可能とする。
- (2) 通所している児童生徒の学習ノートや作品等を指導主事または指導員が必要に応じ学校へ届け、情報交換を行うこととする。
- (3) 通所している児童生徒が学校復帰をめざし、登校について前向きに取組もうと本人が意思決定した際、指導主事または指導員が同伴の元、通所している児童生徒とともに登校する場合があることとする。

3 その他

- (1) 教育支援センターへ通所している児童生徒の在籍校長へ、「□□市教育支援センター」担任等連絡会の実施を依頼しておりますが、本文書は担任等連絡会とは別内容であることを申し添えます。
- (2) 学校において、不登校または登校渋りに陥っている児童生徒が出現している場合は、担当指導主事が関係機関(□□市役所子育て支援課、□□市役所社会福祉課、児童相談所、家庭訪問相談員等)と速やかに連携を図り適切に対応を行いますので、教育支援センターへ相談願います。
- (3) 管理職または学級担任は、積極的に来所していただき、通所している児童生徒に対し、支援及び見守りを行うとともに学級の情報提供等について御配慮願います。
- (4) □□市教育支援センターのリーフレットについては必要に応じ、保護者や職員へ配付願います。(別紙1参照)
- (5) 「□□市教育支援センター通所希望書」及び「□□市教育支援センター通所申請書」についても上記(4)と同様の取扱いをお願いします。(別紙2参照)

2 学校支援を通じた実践

S高等学校の実践（学級数：普9）

学校不適応の予防的取り組みとして、毎年1年生を対象に、人間関係づくりの授業を実施している。子どもと親のサポートセンターが授業の原案を作成し、これをもとに、学校が生徒の実態に合わせアレンジし、年4回の授業実践を行い、併せて協議会を行っている。また、学級診断ツールを用いた研修会を年2～3回行っている。

以下、具体的な内容を示す。

i 支援状況

平成24年度

回	月	日	曜	内 容
1	4	25	水	実態把握(全校), 支援の在り方についての協議
2	5	7	月	生徒の実態把握①, 学年職員との打合せ
3	5	21	月	生徒の実態把握②, 個別ケース会議
4	7	2	月	生徒の実態把握③, 見立てシートを活用したケース会議
5	8	8	水	個別支援計画案提示, 今後の支援予定について
6	9	12	水	授業観察
7	9	19	水	授業観察
8	10	3	水	授業観察
9	10	10	水	授業観察
10	10	18	木	全体研修(学級診断ツールの分析, 生徒理解) 1学年職員研修(人間関係づくり模擬授業)
11	11	8	木	1学年 人間関係づくり授業「考えよう! 気持ちのいろいろ」
12	11	15	木	1学年 人間関係づくり授業「怒りのメカニズムについて学ぼう」
13	1	17	木	1学年 人間関係づくり授業「問題を分析し, 気持ちを伝えて解決の糸口をつかもう」
14	1	25	金	1学年 人間関係づくり授業「上手に自己主張しよう」
15	2	20	水	1年間の総括, 次年度の支援について

平成25年度

回	月	日	曜	内 容
1	4	30	火	学校や生徒の実態と支援の方向性についての打合せ
2	6	7	金	1, 2学年生徒の実態把握①, 学年職員との支援プログラムの打合せ
3	6	19	水	1, 2学年生徒の実態把握②, 学年職員との支援プログラムの打合せ
4	6	28	水	1, 2学年生徒の実態把握③, 学年職員との支援プログラムの打合せ
5	7	9	火	1学年生徒全員の学校診断ツールの分析, 支援プログラムの検討 * スクールソーシャルワーカーも同席
6	10	3	木	1, 2学年 人間関係づくり授業「聴くスキルを身につける」
7	10	31	木	1学年 人間関係づくり授業「あたたかい言葉をかけてみよう」
8	11	21	木	1学年 人間関係づくり授業「よりよい会話のスキル」
9	1	16	木	1学年 人間関係づくり授業「話すスキル」
10	1	23	木	1学年 人間関係づくり授業
11	2			1年間の総括と次年度の支援について

* S高等学校にはスクールソーシャルワーカーが配置されている。

ii 指導の実際

各年度に4回行われた授業の内、平成25年度に実践した「聴くスキルを身につける」の授業案を例として示す。

活動項目	指導者による指示・説明	◇生徒の行動 ◆準備
前日の導入 (帰りのSHR)	<ul style="list-style-type: none"> 明日、皆さんにグループで話すことをしてもらいます。最近、楽しかったことか腹がたったことを思い出しておいてください。 	
1. はじめに	人間関係づくり授業の目標 (7分) 担任と副担任のTT	
ソーシャルスキルの授業の説明 授業の導入	<ul style="list-style-type: none"> それでは授業を始めます。→あいさつと出欠確認 今日は「ソーシャルスキルトレーニング」という授業を行います。まず、「ソーシャルスキル」と言う言葉について説明します。それは人とうまく関わる方法を学ぶことです。つまり人とのコミュニケーションがうまくできるようにするという事です。 この授業では、コミュニケーションの難しさや大切さの理解をしていきます。 皆さんが普段しているコミュニケーションの基本である「話す」と「聞く」は簡単なようで実はとても難しいものなのです。それゆえに誤解があって相手に厭な思いをさせたり、自分が損をしてしまうこともあります。 たとえば「その話は面白い」と言うのも色々な言い方があります。 <ol style="list-style-type: none"> ①つまらなさそうに (生徒に意見を聞く) ②話し手の大事なポイント (板書事項) を押さえて (生徒に意見を聞く) どうですか。同じ言葉でも伝え方でだいぶ違いますよね。 <div data-bbox="427 1037 1166 1160" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>板書 話し手の大事なポイント</p> <p>①声の大きさ ②表情 ③姿勢</p> <p>④距離 ⑤アイコンタクト ⑥身振り手振り</p> </div> <p>また、「話し手」が一方向的に話し続けると「聴き手」はどんな気持ちになるのでしょうか。それはあまり良いコミュニケーションとは言えません。</p>	◇発表
2. 本学習の説明	目標：「聴くスキルを身につけよう」 (10分)	
テーマ・目標・流れの説明	<ul style="list-style-type: none"> では聴くことではどうでしょうか。話をお互いに聴くことができれば会話がスムーズになります。話すスキルと同様に「聴くスキル」もとても大切です。今日は、このスキルを身につけましょう。 「きく」といっても <div data-bbox="427 1391 1166 1473" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>板書 「聞く」＝耳に音が入ってくるのをただ聞いている。</p> <p>「聴く」＝集中してしっかりと内容に耳を傾ける。</p> </div> <p>の違いがあります。</p> <p>それでは聴き上手になるためのポイントを板書します。</p> <div data-bbox="427 1552 1166 1704" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>板書 ①あいづち、うなづき</p> <p>②視線</p> <p>③身体を傾ける</p> <p>④最後まで話を聴く</p> </div> <p>これから聴き方のモデルを見せますから感想を教えてください。</p> <p>モデル1 (悪い見本)</p> <p>A：ねえねえ聞いてよ、昨日部活のとき、先生がさあ。</p> <p>B：(本を読みながら) ふーん…。</p> <p>A：ねえ、聴いている！？</p> <p>(生徒に意見を聞く)</p> <p>モデル2 (悪い見本)</p> <p>A：(怒り気味に) ちょっと聞いてよ！</p> <p>B：どうしたの？</p>	◇発表

	<p>A：友達に本を貸したら、すごく汚くなって帰ってきたんだよ！この本…</p> <p>B：（Aの言葉をさえぎって）それは貸したあなたが悪いよ。相手を見る目がなかったんだね。</p> <p>A：だって小学校からの友達だし、それに…</p> <p>B：（過度にうなづきながら）それよりさー、そんなことより超おもしろいマンガあるんだけど、読んでみたくない？</p> <p>A：そんな話したいんじゃないのに（悲しい表情で） （生徒に意見を聞く）</p> <p>モデル3（良い見本）A、Bともに「うれしい」という感情を表現しながら会話する。</p> <p>A：私の大好きな嵐のCDが発売されたんだよ。前から欲しいと思っていたから、お小遣いをずっと貯めていてつい買ったんだよ。私、すごくうれしくて、家に帰ってからそのCDを聴くのが、毎日の楽しみなんだ。</p> <p>B：そうなんでね。私が聴いた話は、大好きな嵐のCDをお小遣いを貯めて買って、それがうれしくて毎日そのCDを聴くのが楽しみだ、という話で合ってますか？ （生徒に意見を聞く）</p>	
3. 活動 「あなたは聴き上手？」 「聴き上手」は「コミュニケーション上手」（20分）		
ワークシート1の配付	<ul style="list-style-type: none"> ・まずワークシート1を配ります。 	
活動①ワークシート1の記入	<ul style="list-style-type: none"> ・プリントを使い「聴くスキル」について考え、自己評価してみましょう。 	◇記入
ワークシート2の配付と説明	<ul style="list-style-type: none"> ・それではワークシート2を配ります。 ・これから4人グループを作ります。グループで順番を決めてください。その順番は「話し手」になる人です。次の順番の人が「聴き手」になります。それ以外の人は「アドバイザー」になり、全員が必ずそれぞれの役割をするようにしてください。話し手は話題を考えなければいけないので先生の方で30秒間時間を計ります。「聴き手」の「話したことを返す」ことはとても難しいことですが練習すればきつとうまくなります。 	
活動②グループ活動	<ul style="list-style-type: none"> ・それでは先生の方で時間を計ります。 ①それでは「話し手」の人は今から30秒で最近面白かったことや腹がたったことを考えてください。 ②それでは30秒以内で「話し手」は「聴き手」に伝えてください。「アドバイザー」は観察してください。 ③「聴き手」は「話し手」に返してください。 ④「アドバイザー」は「聴き手」にアドバイスしてあげてください。4人組なので4回繰り返す。 <p>時間があればできそうなペアを指名し、発表させてみる。 ※良いところをほめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「聴くスキル」を体験して難しかったかもしれません。人のコミュニケーションでは「話す」と同じくらい「聴く」ことは大事です。この2つのスキルを磨くことによってよりよい人間関係を築くことができるようになるでしょう。また、授業や学校生活の中で是非利用してみてください。皆さんの今日の学習の成果を楽しみにしています。 	◇グループ活動 ◇発表
4. 振り返り（5分）		
ふりかえりシート配布	<ul style="list-style-type: none"> ・ふりかえりシートを配布します。今日の授業で取り上げたスキルは「聴くスキル」です。授業を振り返って感想や意見を書いてみましょう。 	◇記入 ◇回収

iii 成果

各回の支援後、S高等学校から報告書が提出される。以下、報告書より「成果」を記す。
平成24年度

月	成 果
4	今後の生徒への支援及び教員の支援の在り方についての方向性を見出すことができた。
5	1年生の授業観察及び担任、学年主任等との情報交換、指導助言をしていただき、生徒の実態に応じた支援方法について実践的理解を深めることができた。
7	<ul style="list-style-type: none"> 今後のサポートセンターから学校への支援の在り方について意見を交換することによって方向性を見出すことができた。 専門的な視点から指導・助言をいただくことにより、教員、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーが有機的に連携した校内体制が確立されつつある。
8	<ul style="list-style-type: none"> 1学年の学年主任等をまじえて事例研究を行い、個別の教育支援計画について原型をつくることができた。 2学期に実施するソーシャルスキルトレーニングに向けた取組方針を確認することができた。
9	2学期に実施するソーシャルスキルトレーニングに向けての生徒の実態を把握し、具体的な指導内容について調整することができた。
10	<ul style="list-style-type: none"> 1学年の生徒を対象に実施するソーシャルスキルトレーニングの内容と実施方法について研修をおこない、実践に向けた準備が整う 学校生活適応感尺度（学級診断ツール）を活用した生徒理解に関する研修を行い、学校全体における生徒支援の充実が図られるとともに、1学年の職員を対象に具体的な事例に基づくグループコンサルテーションの演習を行うことによって、支援に向けた手立てが可視化された。
11	<ul style="list-style-type: none"> 生徒観察の成果を踏まえ、生徒の実態に応じたソーシャルスキルトレーニングの授業開発を支援していただくことにより、本校職員による授業を実施することができ、生徒の関心も高まり、将来自分の役に立つという意見がこれまでより多く寄せられた。 授業後の研究協議により、課題の明確化と共有、指導技術の向上が図られた。内容と実施方法について研修をおこない、実践に向けた準備が整うとともに、本校職員のスキルアップが図れた。
2	<ul style="list-style-type: none"> 平成24年度の成果や課題について総括し、次年度の支援について協議を行った。 きめ細かな生徒観察や教員との面談、学級診断ツールなどを通して、生徒の実態をより多面的かつ詳細に把握し、個別の支援計画を作成することができた。その情報を共有し、共通の認識の下、組織的な生徒指導、支援が可能になった。また、こうした一連の過程をとおして教員一人一人の資質の向上、指導力の向上が図られた。 ソーシャルスキルトレーニングの支援により、本校職員が授業を実施することができるようになった。これにより生徒の関心も高まり、意識が高まった。

平成25年度

月	成 果
4	授業観察を通して、新入生の状況と上級生の昨年度からの変化を確認。今後の支援の在り方、計画の方向性を共有し、具体的な方策について指導していただくことができた。
6	・1年生の予め指定した生徒を中心に授業観察。養護教諭及びSSWとの情報交換をし、生徒の実態に応じた支援方法について実践的理解を深めることができた。 ・学力、生活、家庭環境等で問題を抱えている生徒についての情報が共有できた。
7	学級診断ツールの分析をもとに、支援が必要な生徒を中心に指導助言をしていただき、生徒の実態に応じた支援方法について実践的理解を深めることができた。問題を抱えている生徒についての支援方法が共有できた。
10	良い聞き手となるためのトレーニングを活発に行うことができた。
11	あたたかい言葉をかけるためのトレーニングを活発に行うことができた。

また、授業後の「振り返りシート」に記入された生徒の主な感想は以下のとおりである。

<あなたの意見・授業後の感想等を書いてください。>

- ・言葉を選んで会話していきたいと思いました。言葉によっては人を傷つけることがあるので、しっかりと気をつけて会話をしたいです。
- ・人の心がよくわかる人になりたい、人にやさしくなりたと思った。
- ・友達とのコミュニケーションをよりよく取れると思うし、相手を思いやることで友達を傷つけない。
- ・相手を傷つけずに済むと思います。強い口調より、もう少しやさしい口調で話すようにこれから気をつけていきたいです。
- ・気持ちよく会話を終われる。
- ・自分の意見ばかりじゃなくて、相手の気持ちも考える。
- ・自分や相手の発する言葉によって人間関係が変わったりすることがよくわかった。これから会話をするときは、言葉に気をつけようと思う。
- ・とりあえず、人と会話することから始めたいと思います。
- ・友人関係が広がる、いろんな人と仲良くなれる。
- ・相手との関係が良くなる。

当センターは、学校支援としてS高等学校に関わり、学級診断ツールの紹介、生徒の見立てと人間関係づくりの授業案検討、研究協議を行った。これは、当センターと学校との「関係機関との連携」を強化するものとなった。

さらに、他の3つの視点からも以下のような成果を見ることができる。

【「支援環境の整備」の視点】

1年時の人間関係づくり授業が、学校不適應の予防的取り組みの一つとなった。

【「適切な見立て」の視点】

学級診断ツールを取り入れ、生徒の状況を客観的に把握し、より適切な見立てによって、実態に即した生徒への支援となった。

【「支援者の資質向上」の視点】

学級診断ツールに関する研修会や、授業内容の検討、研究協議を通して教員の資質向上を図ることができた。